

V) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	葉いもち	平年並	やや少ない	初発生は平年並みの6月15日であった。全般発生期も平年並みの6月第6半旬となったが、初期の病勢は極めて緩慢であった。梅雨期には発病程度の高い圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なく推移し、7月下旬の巡回調査における平均発病株率は3.9%と平年値32.9%を大きく下回った。	置き苗での発生地点率は0.0%（平年値4.1%）と低く、伝染源量は少ないものと推察された。例年病勢が活発化する6～7月の気象は、BLASTAMによる感染好適日の出現日数が6月ではのべ26.0日（平年値12.6日）、7月にものべ77.0日（平年20.8日）と平年を大きく上回ったが、初期の伝染源量が僅少であったため本病の初期進展に抑制的に作用したものと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や粒剤の本田散布が行われた。なお、前年MB I-D剤耐性菌の確認された地域では当該薬剤の使用が控えられた。
	穂いもち	平年並	やや少ない	初発生は平年並みの8月6日であった。中山間地域では発病程度の高い圃場もみられたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	生育が遅れたことにより感受性の高い期間がやや長く続いたものの、伝染源となる葉いもちの発生がやや少なかったため、発生は平年に比べてやや少なくなったものと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や本田での粒剤施用が行われた。
	紋枯病	平年並	やや少ない	初発生は平年並みの6月14日に認められたが、その後梅雨期末期まで病勢進展は緩慢であった。巡回調査圃場では、7月下旬以降、病勢がやや活発化した。早生種栽培圃場では上位進展も活発で、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ発病程度の高い圃場も散見された。しかし、主要品種コシヒカリを含む全般の発生量は、平年に比べてやや少なかった。	梅雨期末期まで病勢進展が緩慢となったのは、気温が低く推移し、イネの分げつが抑制されたことに加え、感染に好適な23℃以上となる日が続かなかつたためと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	ヒトヒウカ	平年並	少ない	5～6月下旬の払い落とし調査では、虫数、発生圃場率ともに低く、全般の発生量も平年に比べて少なく経過した。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカヨコバイ類の同時防除が行われた。
	ツマグロヨコバイ	平年並	やや少ない	第1世代成虫の発生時期は平年並みであった。払い落とし調査では全期間を通して虫数、圃場率とも平年に比べてやや少なく、吸汁害やすす病などの発生は少なかった。	昨秋の発生量が少なく、越冬量は少ないと推察された。8月からは気温が高く推移し増殖には好適であったが、初期発生量が少なかったため全般に平年に比べてやや少ない発生量で経過したと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカヨコバイ類の同時防除が行われた。
	エカメチユウ 第1世代 第2世代	- -	少ない 少ない	予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は極めて少なく、発蛾最盛期は判然としなかった。圃場における被害は第1世代、第2世代ともに少なかった。	近年、発生量は少なく、育苗箱施薬などの防除対策が行われたため、発生が抑えられたものと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。
	イネズグウシ	平年並	やや少ない	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年並みの5月第1半旬に認められたが、総誘殺数はやや少なく、5月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害株率とも平年に比べてやや少なかった。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
	セジロウンカ	やや遅い	やや少ない	予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から認められ、6～7月の飛来量は平年に比べてやや少ない。これに由来する幼虫は7月中旬から発生し、発生量は平年に比べてやや少ない。	7月の気温が低く、降雨が多かったため、次世代以降の発生が抑制されたと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	トイウカ	平年並	やや多い	予察灯での初飛来は7月1日に、以降6日までに県全域に飛来が認められた。これに由来する幼虫は7月下旬から発生し、発生量は平年に比べてやや多かった。収穫期には成虫密度が高い圃場が散見され、9月下旬以降のきぬむすめを中心に坪枯れが発生した。	梅雨明けまでの飛来量が過去10年でH10年に次いで多かった。8月から10月上旬まで気温が高く経過し、増殖に好適な状況であったため晩生品種に被害が発生した。いもち病の発生が少なかったことから防除機会が減少したことも要因と考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。

イネ	コブノメイガ	平年並	多い	予察灯での飛来量は平年に比べて多く、次世代の発蛾盛期は8月第2半旬であった。白変葉は県下全域、特に海岸部での被害が激しい。	梅雨明けまでの飛来量は過去10年で最も多く、これに由来する幼虫の被害が多発したと考えられる。なお、次世代発蛾盛期には大部分の水稻は出穂しており、その後の被害発生は少なかったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	斑点米カメムシ類	平年並	平年並	畦畔雑草すくい取り（6月下旬：頭数1.2頭/10回振・発生圃場率33%、前年1.7頭・46%）、早生品種出穂時（7月下旬：5.1頭/20回振・59%、前年10.5頭・70%）の調査では、発生量は平年に比べてやや少ない。主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。9月30日現在、うるち玄米総検査数量に対する、カメムシ類が原因の着色粒混入による格落ち数量割合は1.28%である。	昨年の発生量が多く、越冬量もやや多かったと推察された。しかし、7月上～下旬の気温は低く、降水量も多く経過し、雑草上での増殖、ほ場への侵入、増殖が抑制されたと考えられる。8月以降は気温が高く、降水量も少ないなど好適な条件が続いたが、初期発生が少なかったことから全般の発生量は平年並みにとどまったと考えられる。	発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。
ムギ	さび病類	—	やや多い	オオムギ、コムギともに発生がみられ、4月以降病勢はやや活発であった。5月中旬の発生量は、発生圃場率9.7%（平年4.7%）、発病茎率6.2%（平年1.4%）となり、平年に比べてやや多かった。	3～4月に気温がやや高く、降雨頻度が少なかったため、発生が助長されたものと考えられる。	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
	うどんこ病	—	平年並	一部で発病程度の高い圃場も認められたが、5月中旬の発生量は、発生圃場率3.2%（平年5.1%）、発病茎率1.8%（平年1.8%）で平年並みとなった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
ダイズ	ハモンヨウ	平年並	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並み～やや多かった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の7割程度とやや少ない飛来であった。圃場での幼虫の発生は8月中旬からみられ、1a当たりの白変葉箇所は9月末には6箇所以上観察される圃場もみられたものの、全般には1.7箇所と平年（2.6箇所）よりやや少ない発生であった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量もやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われたが、8月下旬から9月上旬の降雨のため、防除が遅れた圃場も散見された。
ナシ	黒斑病	平年並	平年並	発生量は7月中旬まで平年と比べて少なく推移していたが、その後増加し平年並みとなった。	6月中旬まで降水量が少なく推移したため、発生量は少なく推移した。しかし、その後の降水量が多く推移したために病勢が活発化し、平年並みになったと考えられる。	袋がけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	早い	平年並	4月下旬に一部の圃場で発生が散見されたが、全般の発生量は平年並みであった。	前年の発生が多く越冬伝染源は多いと推察された。しかし、4月から6月中旬まで降水量が少なく推移したため、平年並みになったと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	やや少ない	ハダニ類の発生量は当初やや少なかったが4月下旬に花叢への寄生率はやや高かったが、その後発生は少なくなった。全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なく、4月下旬に気温が高く推移したため花叢への寄生が平年より早くなったと考えられる。その後、7月および8月下旬には降雨も多く密度は抑制されたと考えられた。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。
	モシクイガ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや遅く、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであった。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられる。また、4月、5月の気温はやや高く発生時期はやや早くなった。発生量はやや多かったが、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みになったと考えられる。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。

ナシ	ナシ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや遅く、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであったが、一部被害の多い圃場がみられた。	3月中下旬、4月は気温が高く、越冬世代成虫の発生時期はやや早くなった。越冬量がやや多かったことから、各世代の発生量はやや多くなったものと思われる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	平年並	やや少ない	4月下旬の寄生梢率、寄生程度はやや低く、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともやや少なかった。全般の発生量はやや少なかった。	3月下旬の気温が高く経過したが、4月上旬の気温が低かったため発生時期は平年並みであった。その後、降雨等の影響もあり発生はやや少なく推移した。	5～6月に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	やや早い	やや多い	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや早かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや多く、幼虫による被害もやや多かった。	3月下旬の気温が高く、越冬世代の発生時期はやや早くなったと考えられる。4月以降の気温も高く推移し、第1世代以降の発生もやや早く、発生量も多くなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	クワカガラムシ	—	少ない	全般の発生量は少ない。	—	防虫果袋が使用された。
カキ	炭疽病	平年並	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	一部に無防除や薬剤散布の遅れた園が見られた。
	うどんこ病	平年並	やや少ない	6月下旬に初発を確認した。8月下旬までの発生量は平年並みで推移したが、9月下旬はやや少なかった。	6月下旬から8月までの降水量が多かったものの、防除の徹底により発生量は平年並みであったと考えられる。9月は降水量が少なく、発生量はやや少なくなったと考えられる。	薬剤散布の回数の少ない園や散布の遅れた園も見られたが、全般には適切な防除がなされた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	カキダアザミウマ	平年並	平年並	5月6日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第2半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年に比べてやや少なかった。果実被害は7月中旬から見られたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量は少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
	カメムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでは5月7日に、予察灯では5月17日から誘殺された。その後、誘殺数は平年より少なく推移した。予察灯では8月下旬から9月上旬にかけて誘殺数の増加が認められたが誘殺数は平年並みであった。被害果実は8月下旬から認められ、平年に比べて少なかった。	昨年はヒノキ毬果が平年並みでカメムシの越冬量も平年並みと考えられた。本年はヒノキの花粉飛散量から毬果も平年並みと考えられ、圃場への飛来は平年並みと予測された。しかし、7月の降雨及び低温の影響からカメムシ類の誘殺数は少なく推移し、圃場での被害もほとんど認められなかった。	8月下旬に薬剤による防除が行われた。
夏秋 キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	全般の発生量はやや少なかった。	9月以降降水量が少なく、また、虫害、台風等による傷害の発生が少なく、抑制されたと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並み～やや多かった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の7割程度とやや少ない飛来であった。圃場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、10月に入り発生量はやや増加したものの全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われたが、8月下旬から9月上旬の降雨のため、防除が遅れた圃場が散見された。
	コナガ	—	平年並	幼虫の発生量は全般に平年並みであった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。

冬キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	一部で多発生圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	一部で発病程度の高い圃場もみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並み～やや多かった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の7割程度、10月末には平年の6割程度とやや少ない飛来であった。圃場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、10月に入り発生量はやや増加したものの全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	平年並	幼虫の発生量は全般に平年並みであった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
タマネギ	白色疫病	早い	やや多い	3月下旬の発生量は、発生圃場率が48.0%（平年23.2%）、発病株率は1.5%（平年0.9%）と平年に比べてやや多かった。	2月～3月上旬にかけて気温が高く推移したことから、発病が助長されたものと考えられる。	薬剤による同時防除が行われた。
	べと病	—	少ない	3月下旬における越年罹病株の発生量はほぼ平年並みであった。二次感染株の発生量は4月下旬には平年に比べてやや少なかった。5月に入ると病勢はさらに鈍化し、中旬の発生量は、発生圃場率11.1%（平年38.7%）、発病株率0.06%（平年5.68%）と平年に比べて少なくなった。	5月以降病勢がさらに鈍化したのは、降水量がやや少なくなったことに加え、的確な薬剤散布がおこなわれたためと考えられる。	越年罹病株の抜き取りと薬剤散布が行われた。
	ボトリチス属菌による葉枯れ	—	少ない	4月には県下各地で発生がみられ、発生量は平年並みであった。5月に入ると病勢進展は緩慢となり、その発生量は、発生圃場率18.5%（平年58.2%）、発病株率0.4%（平年14.0%）と平年に比べて少なかった。	5月以降病勢が緩慢となったのは、降水量がやや少なくなったためと考えられる。	薬剤による同時防除が行われた。
	さび病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は特に行われなかった。
イチゴ	灰色かび病	—	やや多い	春季に病勢がやや活発化し、全般の発生量は平年に比べてやや多くなった。	2月～3月上旬にかけて気温が高く推移したことから、発病が助長されたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	促成、半促成栽培における発生量は全般に平年並みに推移した。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数はやや多かったが、本種に卓効の薬剤が使用されたため発生量は平年並みなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。